

## 2025年度鳴門市人権地域フォーラム(前半記録)

### テーマ 「ひとごと」から「わがこと」へ

～自己をみつめ、語り、人と人がつながる人権学習～

日時: 2025年8月22日(金) 13:30～16:30

会場: 鳴門市役所 2階大会議室

コーディネーター M(T-over人権教育研究所・人権こども塾共同代表)

パネリスト Y(人権を語り合う中学生交流集会運営委員会事務局)

N(1996年度I中卒業生・T-over人権教育研究所・人権こども塾クルー)

H(1996年度I中卒業生・徳島県教育委員会人権教育課指導主事)

#### 《司会者》

お待たせいたしました。定刻となりましたので、只今から2025年度鳴門市人権地域フォーラムを開催させていただきます。

本日は手話通訳を特定非営利活動法人「あたたかい手コラボ」の皆様をお願いをしております。よろしくお願いいたします。

(丁寧に頭を下げて)なお、本日のフォーラムは16時30分を閉会予定とさせていただきます。お手元のアンケートについては、お帰りの際に、受付のアンケート回収箱に入れていただきますよう、ご協力をよろしくお願いいたします。それでは、最初に主催者を代表いたしまして、鳴門市教育委員会教育長 Aよりご挨拶を申し上げます。

#### 《鳴門市教育委員会教育長》

(登壇者と会場に深く一礼をしてマイクの前に戻り)2025年度鳴門市人権地域フォーラムが開催されるにあたりまして、一言ご挨拶申し上げます。本日はご多用の中を、各地から多数の皆様にご参加をいただき、2025年度鳴門市人権地域フォーラムがこのような盛大に開催できますことに、厚くお礼申し上げます。また、日頃より皆様方におかれましては、本市の教育行政に対し、ご支援ご協力をいただいておりますことに対し、心より感謝申し上げます。

さて、本市におきましても、これまで皆様のご協力をいただきながら、同和問題の早期解決に向けました、各種施策の総合的な取り組みを推進してまいりました。しかし今なお、同和問題を初めいじめや虐待など子どもの人権問題、高齢者の人権問題、そして、性の多様性、障がい者、外国人に対する差別問題、または、高度情報化社会が進む中、インターネットによる人権侵害等、基本的人権が十分に保障されているとは言い難い状況にあります。

様々な人権問題は、私たち一人一人の課題であり、一人一人が人権尊重の担い手であることを深く認識し、自分のこととして捉え、その解決のため主体的に取り組み、「人権尊重のまちづくり」の実現に向けて、より一層の人権教育、人権啓発が急がれるところであります。

ところで、今日お集まりの皆様方はすでにご存じのことと思いますが、昨年末にNHKラジオ深夜便【人権インタビュー】「語り合い 夢を託す」の中で、長年に渡り、人権地域フォーラムのコーディネーターとしてお世話になっているM先生が、ご自身の生い立ちから学生時代を経て、教師として部落差別をなくすための「語り合いの人権学習」を積み上げて来られた過程を話されました。

小学生の時、初めて部落差別に出会った時の切ない思い、中学生の時、部落差別をなくすために教師の道へ進むことを決意されたこと。学生時代に自分のことを一番親しい友人に打ち明けたこと。下宿を引き払う時に「スタチの苗木」を植えられたお父様に対する思い。その思いがご自身の教師としての道を歩む過程で段々と深化していったこと。

そして、お父様がおっしゃった「お前のような先生がおったら、部落の子は嬉しいな」という一言。その一言を耳にした時は、本当に胸が震える思いがいたしました。自分を語ることは勇気のいることですが、そこから生まれる人と人とのつながりは、何物にも代えがたく、差別をなくす大きな力となることを確信しています。

本日のフォーラムにおきましても、『ひとごと』から『わがこと』へ」をテーマに、パネリストや会場からの意見が参加者の心を揺さぶり、一人一人の人権意識が磨かれ、自己をみつめ語り合い、人と人とがつながれる、実りの多い人権学習の機会となることを願っております。

結びとなりますが、今年度もこの人権地域フォーラムが、松茂町、北島町、藍住町、板野町、上板町の人権教育推進協議会の関係者、そして、コーディネーター、パネリストの皆様方の積極的なご協力をいただき開催できますことに、改めて心より厚くお礼を申し上げ、私の挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。（拍手）

## 《司会者》

それでは、本日の人権地域フォーラムに登壇いただいています、講師の方々をご紹介します。皆様向かって左側から、本日のフォーラムのコーディネーターを務めていただきます、T-over人権教育研究所・人権こども塾共同代表 Mさんです。（立ち上がり「よろしくお願いします」挨拶をし、着席すると同時に大きな拍手。パネリストも、同様に名前を呼ばれる度に立ち上がり、挨拶と拍手が繰り返される）

続きましてパネリストの方々をご紹介します。人権を語り合う中学生交流集会運営委員会事務局 Yさんです。続きまして、1996年度I中卒業生・T-over人権教育研究所・人権こども塾クルー Nさんです。続きまして、1996年度I中卒業生・徳島県教育委員会人権教育課指導主事 Hさんです。

それでは、Mさん、以後の進行につきましてよろしくお願いいたします。

## 《コーディネーター M》

（笑顔で元気よく）皆さんこんにちは。（会場から「こんにちは」元気な声が返る）教育長さんの言葉が心に響きます。ありがとうございます。今からラジオの話になるんですけど、昨年の9月にT-over人権教育研究所・人権こども塾のホームページにメールが届きました。時間の関係で、メールの原稿、端折って紹介します。

【NHK徳島放送局のHと申します。

新聞記事を通してT-over人権教育研究所さんのご活動を知り、ご連絡いたしました。人権をテーマに取材をしたいと考えています。今年入社し、徳島へ来て、徳島県庁前の「なくそう部落差別」というスローガンを通して、徳島の同和問題について知りました。Mさんが執筆された『スダチの苗木』に込められた思いや教育活動について、お話をお伺いさせていただけないでしょうか。】

このメールがきっかけで取材を受け、12月に「人権インタビュー」のラジオ放送がありました。約40分の放送です。

このNHKラジオ深夜便「人権インタビュー」冒頭の言葉です。それはT-over人権教育研究所・人権こども塾がテーマとしてきたことです。私がNHKのアナウンサーに返した言葉です。それは、今、まさに人権学習で問われることです。その冒頭のインタビューの言葉をパワーポイントの映像で観ていただきます。

【アナウンサー H】

徳島県のM中学校で、中学校教師をされているMさんです。今日はよろしくお願いいたします。人権学習の中でも、特に被差別部落の問題に力を入れていらっしゃると思いますが、今、部落問題を生徒たちと対峙して、どのようなことを感じていますか？

【M】

子どもたちというのは、ほとんど部落問題を知りません。

【アナウンサー H】

知らないんですか。

【M】

はい、知りません。で、小学校の時にそういった学習をしとっても、残っていません。

中学校に入った時に、「部落問題って何？」っていう子どもたちが、もう、大半です。

先生方の中にもね、部落問題というのはなかなか学習をした経験がない方も、たくさんおいでるわけで、当然、子どもたちもその問題に対しての関心は低いし、まず、知らないっていう状況ですね。

そういう子どもたちにどう届けていっていった時に、結局、私の生きざまなんですね。私自身の存在が資料になるわけですね。だから、私が教材となった。私自身の生きざまを子どもたちに問うことによって、今まで、部落問題がひとごとだったり遠くのことだったのが、今、目の前にいる先生が、その問題と闘ってきた、その問題と向き合ってきた先生であるっていう中で、部落問題を、やっぱり、自分に引き寄せて考えていく学習になっていきます。

(一言一言を噛みしめるように、じっくりと) T-over人権教育研究所・人権こども塾のテーマ、それは今まさに人権学習で問われていることです。「共感と連帯」です。「信頼と尊敬」です。出会った子どもたちへの心からの「感謝」です。この思いがあるから、子どもたちに私自身の本当の思いを語ることができます。

教師になった22歳の時に、まさか自分が生徒に自分が部落出身であることを語るとは、想像もしませんでした。20代前半の頃によく生徒たちに問われました。「どうして先生はそんなに同和問題に一生懸命になるんですか？」と。今だったらサラッと云います。「先生自身のことなんです。先生自身が部落に生まれたんです」と思いを込めて語ります。

でも、20代の頃は言えませんでした。私の中にこだわりや恐れ、怯えがあったし、「共感と連帯」「信頼と尊敬」と言いながら、それが本物になっていなかったと思います。子どもたちとの「共感と連帯」「信頼と尊敬」が、私自身の人生を大きく変えていきました。

様々な学校で起こっている様々な問題も、この思いや願いが学校全体に溢れていったなら、教育活動が大きく変わっていくだろうし、教師も子どもも生き生きとした学校生活が送られていくと思います。

(力を込めて) そして、解放されていく教師の生きざま、その姿こそが教材になっていきます。親の誠実な姿が子どもたちの心に染み込んでいくように、教師の熱と光が子どもたちの背中をぐっと押していきます。教師の本気の言葉が、本気の語りが生徒の本気の語りを生んでいきます。

これが、「T-over人権教育研究所・人権こども塾」が求めてきたテーマです。(力強く) 人権を語り合う中学生交流集会は、1996年度にスタートした徳島県部落解放学習会中学生集会から30年積み上げてきました。横にY先生がいますけど、この30年間、彼が中心になって、この集会は積み上げられてきました。

(パワーポイントの映像を確認しながら) スライドは、T-over人権教育研究所・人権こども塾のホームページで紹介している中学生が本気を語り合った30年のドラマの記録です。

まず、第1回から第5回までの報告書、1996年度から2000年度の歩みの記録です。

第1回は「徳島県部落解放学習会中学生集会」としてスタートしました。当時、I中学校の部落の子どもたちが、高校に行った時に孤立しないように、高校進学後の仲間づくりをテーマとして、同和対象地区学習会に学ぶ部落の子どもたちの集会でした。

(じっくりと) しかし、2002年の同和对策特別措置法の法律が切れて、状況が変わってきます。スライドは、第6回から第10回までの報告書、2001年度から2005年度の歩みの記録です。

2002年度より名称を「徳島県人権を考える中学生集会」と変更し、様々な想いを持った子どもたちによる語り合いが積み上げられてきました。

そして、2006年度の「中・高生による人権交流集会」に変更を迫られる中で、中学生が部落差別の現実に関心を持ち、しっかりと部落問題を語り合う中学生集会を創造していくために、県外の仲間、香川県や鳥取県や、福井県の部落の子どもたちが参加して、交流を深めることを通して部落問題を語り合う集会、「人権を語り合う中学生交流集会」と名称を変えて、学校の枠を超えた語り合いの人権学習を積み上げてきました。

そして、この集会は学校の枠をどんどん広げていきました。2007年度からはK中学校の子どもたちが参加するようになり、その中心として、大活躍してくれた時があります。2012年度からはA中学校の子どもたちが、生き生きと活動する姿に癒やされていきました。2017年度からは、M中学校の子どもたちがなくてはならない存在になっていきました。

毎年、応募してもらうキャッチフレーズの数もどんどん増えていきました。ポスターの原画もたくさんの応募があり、本当に素敵な原画が毎年選ばれていきました。

(嬉しそうに) 集大成となった、今年の7月20日の最後の中学生集会のパネルディスカッション。今、一番前席に並んでくれています、[T-over人権教育研究所・人権こども塾]の高校生がリードしてくれました。凄いです。彼らの10分、20分の見事なプレゼンや語りに癒されます。この後、いろんな思いや願いを語ってくれると思います。

そして、この子どもたちを中心に、昨年は岡山県の長島愛生園で一泊研修をしました。夜、膝を突き合わせて語り合う一泊研修。一泊研修だから語れる言葉があります。

かつて、学習会の一泊研修で教師が初めて自分のことをさらけ出す語りに出会ってきました。その教師の語りに寄せて、子どもたちがそれに重ねて自分のことを語る。そんなよろこびが溢れる人権学習を積み上げてきました。

今年度、第2回目となる「人権こども塾」一泊研修は、瀬戸内海、小豆島のすぐ隣の島・豊島(てしま)に行ってきました。豊島での学びは、今求められる「SDGs」についての学習を深める機会となり、「豊島自然の家」で体験したバーベキューや花火、手が届きそうな満天の星空に、人権学習でつながった仲間との絆を確かめる機会となりました。

そして、一泊研修ならではの語り合いは、参加者一人一人が自分自身の中に抱え込んできた想いを吐き出し、一人一人が人間として解放されていく語り合いとなっていきました。写真にあるように、「豊島自然の家」の畳の部屋で、心を込めて語る一人一人の言葉に集中し、その思いに深く学んでいく姿に、心癒やされる時間を過ごしていきました。

この一泊研修は、高松港から船をチャーターして行くという大がかりな取組でしたが、その大変な労力が私たち一人一人の中に大きな財産を残してくれました。

(精いっぱいの思いを込めて) 昨年度の「T-over人権教育研究所・人権こども塾」の閉講式。丁度、狭山差別事件の冤罪を晴らせぬまま亡くなった石川一雄さんの葬儀の日と重なったので、その場で黙とうをしました。この閉講式を徳島新聞に大きく取り上げていただきました。この新聞記事は、石川一雄さんを追悼する人権こども塾閉講式、2025年3月21日徳島新聞です。つい先日、徳島に帰ってこられた妻の石川早智子さんを囲む会に「T-over人権教育研究所・人権こども塾」の子どもたちが参加し、早智子さんと交流する様子が、2025年8月18日の徳島新聞で紹介されています。

この一つ一つの取組は、パネリストのY先生の強力なリーダーシップによるものです。今からY先生に、人権を語り合う中学生交流集会運営委員会事務局として、中学生集会30年の取組と、子どもたちの命がキラキラと輝いていく語り合いの人権学習の取組についてお話ししていただきます。それでは、Y先生、お願いします。拍手をお願いします。(拍手)

## 《パネリスト Y》

Yです。よろしくお願いします。(ニコニコと) 基本的に落ち着きがなくて、立って話をさせていただきます。

## 戦後80年の節目 学校の現状

30年やっっては来たんですけど、話が全然違うかもしれませんが。今夏休みで、1学期の終わり、終業式の時に、何を話をするんだろうかなということを意識しながら、いろんな場面で先生方の言葉を聞いていたんですけど。(一言一言に思いを込めて) 今年戦後80年ということで、新聞もそうですけど、ニュースやテレビ番組等でいろんな特集をやっています。

(じっくりと) 81年でも82年でもしなければいけないことではあるんですけど、80年だからこそ取り上げていることというのがあると思うんです。戦後80年という大きな節目に対して、子どもたちに伝えたいことがたくさんあるんです。子どもたちに見てほしい番組がたくさんあるんです。読んで欲しい新聞記事がたくさんあるんです。そのことに触れて、先生方、校長先生が何を話すんだろうかなと思いながら聞いていたんです。

皆さん、それぞれの学校現場ではどうだったでしょうか。私の身近なところでは、残念なことにしかなりませんでした。中学校でしたら、徳島の場合よく沖縄に行くことがありますけれども、6月23日の朝に、あるいはそれ以前に、6月23日というのはどうい

う日なのかなということで、校長とまでは言いませんが、学年主任さんであるとか、人権主任さんであるとか、担任さんが話をしてくれたのかなというのを思いながら話を聞いているんですが、それも残念な結果になりました。

それは、7月4日の徳島大空襲についても同じことが言えます。大事なことを大事にしていく。そういう学校現場や教育でないといけないのではないかと思います。

### 最後の「人権を語り合う中学生交流集会」

中学生集会の話になるんですけども、総括する部分については、また後で話をさせていただくこととして、今年も中学生集会30年目を行うことができました。これは、何を言っても参加してくれる中学生、高校生がいての話です。参加する子がいないと成立しません。ですから、中学生、高校生がいてなんぼの世界の話です。

今回の中学生集会は、パネリストとして卒業した高校生3人に登壇してもらって、まず話をしてもらいました。その後、意見発表があったんですが、コンパクトにそのパネリストのこただけについて話しておきます。3人の高校生に、今日のこんな具合に登壇してもらって、話をしてもらったんですね。

### ～あっちゃんの川崎病の語りから広がった思い～

(笑顔で前の席の高校生を見ながら)まず1人目、「あっちゃん」。「あっちゃん」という子が献血の話をしてくれた。その場にいた人はその時のことを思い出してもらえるかなと思います。献血に行こうという話をしてくれました。悪いことではないですね。

では、なぜ「あっちゃん」が献血の話を始めたか。その日1日を、後になってずっと振り返ってみて思ったんですけど、「あっちゃん」は、なぜに献血の話をしたかという、自身の病気、川崎病のことについて話をしてくれました。川崎病って聞いて、聞いたことはありますが、詳しくは知りませんでした。ましてや身近になった人がいません。ですから、そんなに自分ごとのように思っておりませんでした。

ただ、あっちゃんの話聞くにつけ、献血は大事だと思うんです。だけど、何を言っても、100人くらいの参加者の中で、それは極々少数であって、「あっちゃん」だけの話のように私は思っていたんです。(力強く)ところが、その後の話し合いの中で出てくるのが、「うちの子どもも川崎病だったんです」という発言であるとか、「実は私も川崎病でした」という中学生の発言等が出てくるんです。

その後の中学生集会の感想文が寄せられた文章の中にも、似たような感想がありました。

「うちの子が川崎病でした。でも、そのことを子どもたちには詳しく伝えられていません。今日の、『あっちゃん』の話を聞いて、自分も改めて子どもに川崎病のことについて話をしたいと思います。命の大切さというものについても話をしていきたいと思います」

こういう文章が感想文の中に返ってきました。そんなにいるのかと私は思いました。もっと少ないのではないかな。そんなにいるのかと思ったんですけど、「あっちゃん」の話によって、自分一人じゃないということも多分感じたんじゃないかなと思うんです。うちの家だけじゃない。他にもいるんだ。

イメージとしては他にもいるということはわかっているけど、でも、実際にこんな近くに自分と同じ立場の人間、あるいは家族がいるんだということは、励まされるというか、勇気づけられるのではないかなと思うんです。

それは、それぞれの学校の、教室とか学年とか、学校全体の中でも可能なことであって、みんな一人一人の個性が本当に大切にされるということは、それぞれの持っている特性が、互いに認め合えるという、そういうことだと思うんです。そのためには自分の特性、アイデンティティをどこかで明らかにしていく必要があるのかもしれない。明らかにしたくない人もいるかもしれないけども、明らかにしたい人もいるかもしれない。でも、伝えていくことで、自分の個性特性が、どこか認知されたり認められたような感覚になっていく。そういう意味で、「みんなで語り合う人権学習」の意義というのはすごく大きいんだろうなと、「あっちゃん」の発表を聞いて思った次第です。

### ～あすかの死刑制度の語りから広がった思い～

(イキイキと)2人目、「あすか」っていう子が発表します。彼女は、自分の個性のことを話をしてくれたんですけども、よく「個性」というと良いことばかりをあげつらうのですが、ところが、自分のマイナス要因であるとか、苦手なこととか嫌なこととか、そういう

ものも個性ではないだろうか。そこに目を向けることもすごく大事なことでないだろうかという話をしてくれた。

その話から繋がっていつどこに行ったかと言うと、さきほど画面にも出てきましたが、例えば犯罪を犯した人も、その人たちにも個性があるんじゃないだろうか。その人の全てが悪いわけじゃない。部分的に「犯罪を犯してしまう」という負の部分はあるかもしれないけど、その人のすべてを否定することではない。ましてや、石川一雄さんのように、「自分はやってない。冤罪である」という人を死刑にしてしまったら、やっぱりそれはおかしい。だから死刑制度はおかしいんじゃないだろうか」という話をしてくれた。

(笑顔で会場に向けて問いかけるように) 高校1年生です。皆さん、高校1年生の時に、死刑制度をしっかり考えたりしました？(照れくさそうに) 私はしていません。そんなことを考えたりもしません。高校1年生で死刑制度のことについて、こんなに真剣に考えるのかと思ったんです。まず、そのことが凄いなと思ったんです。

もっと、その後に凄かったというか、面白いなと思ったのは、それにかみついてきた子がいたわけですよ。「死刑制度はあっていい」という子が現れたんです。それは、「被害者感情として、やっぱり自分の大事な人を、命を奪われたら、それは、相手のことを、犯罪を犯した人のことをやっぱり許しがたい部分があっても、それはおかしくない。死刑にしてくれて自分が言い出せなくても、国によって死刑にしてもらっても、自分はいいと思う」って言ったんです。

やっぱり僕は共感です。それは本当に共感しました。皆さんもそうだと思いますけど、例えば我が子が殺されて、命を落とされて、どうしてやった本人が堂々と生きていられるのか。刺し違えてでもそいつのことを殺してやろうと思う部分はあります。いけないこととはわかっています。でも、自分の心情としてはやっぱり許しがたいです。だから、その子の言った意味もわかる。でも、先に「あすか」が言ったこともわかる。(ゆっくりと、言葉を大事にしながら) これは平行線だと思うんですよ。どこまで行っても。

(力強く丁寧に) 私らだけじゃない、専門家の人とかそれに携わってきた人が、長年ずっと議論してきて、それでも決着がつかなくて、今、日本では死刑制度はありますけれど、それでも決着がつかないようなことを、高校生が議論して決着がつくわけがないと思うんです。決着がつかないということを知っているながらも、それでもなお、話し合いをする意味というのは、私はあると思うんです。結論のつかないことを話し合いをする意味はあると思うんです。

(当時に思いを馳せながら) 昔、これは、詳しいことは後程M先生から話をしてもらったらしいと思うんですが、I中学校の生徒を連れて、T中学校という所に、全体学習をしに生徒を連れて行ったことがあるんです。私も、当時同和教育主事だったので、代表して一緒に行ったんですが、その時の場面を思い出して。

平行線の話が出たんです。「この学習が必要だ」というのと、「この学習はいらない」という、2極対立の話が続いたんです。もし、自分が授業をする立場だったらこれはどうしよう。これは困ったと思ったんです。私は授業していないんです。担任だったのはM先生でしたから。でも、もし自分がこの授業をしていたらどうしようと思ったんです。授業を横で見ながら、記録しながら困ったんです。(嬉しそうに) それを子どもたちはものの見事にやっていったんです。

それを見ながら、「ああ、こういうのが必要で大事なんだな」と痛感したんです。「平行線の中で手をつなぐ」という作業です。「平行線だけ手をつなぐ」という作業です。「こういうことをしていかなければいけないだろうな」と思ったということの思い返しました。そういう「あすか」の話だったんです。

### ～みおの病気の両親との語りから広がる思い～

3人目が、(記録をじっくりと確認しながら) 高校1年生の女の子の話なんですけど、彼女は、自分の家族の話をまずしてくれました。ご両親の話をしてくれました。なかなか治らない難しい病気を抱えたご両親の話です。その中で、自分が生きていく中でいっぱい不都合な面が出てくるんですね。ご両親の病気であるが故に、自分が担わなければいけないこと。

つまり、今でいう「ヤングケアラー」です。その部分の話をしてくれます。それに合わせて、5年前のコロナ禍の出来事。それから、映像にも出てきましたけれども、去年子ども塾で行ったハンセン病療養所での、ハンセン病元患者のお話。それがくっついていくんです。

ハンセン病療養所での学びをコロナ禍の時に活かさなければということと、後で彼女と話をしたのは、ヤングケアラーと今の時代に言うけれど、年配の方でしたらわかると思うんですけど、昔で言う、子守奉公のようなものですね。子どもじゃないけど、逆に今の時代で言うと、高齢者介護。子守奉公じゃないけど、それと違う形で奉公せざるを得ない子どもが今の時代にいる。場合によっては、家計を助けるために、自分がバイトに出て自分の学業の資金を稼がざるを得ないという。丁稚奉公ですのよう

なものよね。

だから、ヤングケアラーって言葉に変わってしまいましたが、子守奉公、丁稚奉公とヤングケアラーというのは、結びつけて考えなければいけないのではないだろうかと思うんです。ということは、具体的な背景として、格差があ那时的ように進んでいる。そういうことが今言えることなんだろうなと思います。

そんなことを話してくれた彼女は誰だったかな。「みお」ちゃんです。「みお」ちゃんが話してくれた最後にこんなことを言ってくれました。「無知は恥である」という話をしてくれた。私は、「ああ、そうだなあ」と思ったんです。それに共感する子も発言として出てきました。「自分もそう思った。だから、今壇上で話をしてくれて、すごくスツとして嬉しかったです」という中学生の発言もあります。

(思いを込めて) その一方で、午後からこういう発言もあったんです。「無知は恥じゃない。知ろうとしないことが恥なんだ。人間というのは知らないことがいっぱいあるけど、そのこと自体が恥ずかしいわけじゃない。知ろうとしないことが恥なんだ」と言ってくれた子がいるんです。これも、その時に私も思ったんですけど、言葉を深く掘り下げるという作業。かつて、同和教育の時代に、散々それはやったことなんですね。言葉を深く掘り下げていく作業は、すごく大事な作業だと思うんです。

### テレビドラマ「舟を編む」から「言葉はつながるためにある」

ちょっと話がそれますが、今週最終回だった「舟を編む」というNHKのテレビドラマ。三浦しおんさん原作のテレビドラマなんです。「無知は恥」という言葉がずっと私の中に残って、「知らない」とってどういうことなんだろうと思って、知らないことは悪のようなイメージが私の中にあつたんです。

(イキイキと問いかけるように) だけど、皆さん、こんな経験ありません？ 知らないことを知った時の喜びってありません？ 知らないことに気づいた時の喜びってありません？ そこに共感があつたりとか、驚きがあつたり喜びがあつたりとか。逆に苦しみがあつたりとか、辛さがあつたりとか、憎しみがあつたりとかもするんですけど、でも、知らないことを知ることによって心を揺さぶられる場面というのが、あると思うんです。

ということは、知らないことは悪じゃない。逆に、知らないことが知れたことによってありがたみというか、喜びというか、そういうこともあると思うんです。そのテレビドラマ「舟を編む」の最終回にこんな台詞があつて。書き留めてきたんですけど、「言葉は人とつながるためにある」あれは、辞書をつくる編集部の物語です。

「言葉は人とつながるためにある」

もちろん、言葉は武器になってしまうこともあります。人を分断することにもなるし、いじめや差別に使われることもあると思うんです。だけど、それでもやっぱり、言葉は人とつながるためにある。そうだなあと思いながら、あのテレビ番組を観ていました。

私たちは結局、「みんなで語り合う人権学習」の中で、やりたいこと、してきたことというのは、その「言葉で人をつなげる作業」だと思うんです。(笑顔で言葉をつなぐ) どうしてそのことをどこの学校でもやらないかなあという、不思議さは私の中に残ったままにあるんです。みんなやったらいいのという思いはあるんですが…、本当にやるべきこと、やったらいいこと。そんなふうに思っています。とりあえずはこんなところで終わっておきましょう。また機会があつたら続きはその時に。(拍手)

【前半2へ続く】